

柴苓湯による感染性胃腸炎の治療

暁小児科内科(東京都) 院長 広田 暉子

最近、ノロウイルスなどの微生物に起因する感染性下痢症が流行している。これら胃腸炎に対して西洋医学では対症療法が中心にならざるをえないことを考えると、漢方治療は選択肢の一つとして有用性が高いと考えられる。そこで、柴苓湯を中心とした漢方治療について述べてみたい。

Keywords 柴苓湯、感染性胃腸炎、ウイルス

はじめに

最近、ノロウイルスなどの微生物に起因する感染性下痢症が流行している^{1, 2)}。このような感染性胃腸炎の原因としてはウイルスのみならず、病原性大腸菌、サルモネラ、キャンピロバクターなどの細菌や真菌、寄生虫もあげられる。

これら胃腸炎の流行は世界的な広がりを見せ、また、次第に重症化、慢性化する傾向にある。主としてノロウイルスやロタウイルスによる感染がはじめにあり、腸内環境の悪化とともに細菌や寄生虫の関与も相まって重症化、慢性化すると考えられる。さらに宿主側の免疫能などの問題もあり、小児や老人ではとくに罹患し易くなっている。

西洋医学では輸液、食事療法といった対症療法による治療法しかない¹⁾ことを考えると、漢方治療は有用である。そこで漢方治療について、柴苓湯を中心に述べる。

柴苓湯について³⁻⁵⁾

柴苓湯の原典は『世医得効方』(1337年)で、小柴胡湯と五苓散を合和して柴苓湯と名づけられた。それによれば、「傷風、傷暑、瘧を治するに大効」と記載されており、炎症を伴った疾患に用いられたと思われる。

また、浅田宗伯の『勿誤藥室方函口訣』には「此の方は小柴胡湯の証にして煩渴下痢する者を治す。暑疫には別して効あり」とあることから、夏の発熱性下痢に有効ということであろう。

柴苓湯を理解するために、小柴胡湯と五苓散⁶⁾の特徴について考えてみたい(図)。

小柴胡湯は柴胡を主薬として構成された方剤である。柴胡には熱を冷ます作用(解熱・清熱)があることから熱性疾患に用いられるが、黄芩と一緒に使用するとこの作用が強くなる。さらに半夏、生姜が加わることで嘔気にも有効と

図 構成生薬

小柴胡湯の構成生薬

柴胡	7g
黄芩	3g
半夏	5g
人参	3g
生姜	1g
甘草	2g
大棗	3g

五苓散の構成生薬

沢瀉	5g
猪苓	3g
茯苓	3g
白朮	3g
桂皮	2g

柴苓湯の構成生薬

柴胡	7g
黄芩	3g
半夏	5g
人参	3g
生姜	1g
甘草	2g
大沢瀉	3g
猪苓	6g
茯苓	4.5g
茯苓	4.5g
白朮	4.5g
桂皮	3g

なり、人参、甘草、大棗が補気健脾に働き、消化吸收機能・全身の機能を賦活して抵抗力を高める。即ち小柴胡湯には半表半裏の往来寒熱(肝胆の熱)を冷まし、自律神経の緊張を緩和して消化管の働きを正常化する作用がある(表1)。

一方、五苓散の構成生薬である沢瀉、猪苓、茯苓、白朮はいずれも水分調節作用があり、余分な水分を取り除く作用を有する。さらに血管拡張と血行促進作用を有する桂皮が加わっているため、五苓散は水分の偏在をなくす方剤であると捉えることができる。五苓散は胃腸炎による下痢や嘔吐を治す一方で、脱水時の水分バランスを整える作用もある。五苓散を脱水症の小児に投与すると点滴がしやすく

表1 小柴胡湯の構成生薬の薬理作用と薬能

柴胡	清熱、抗菌、抗ウイルス、消炎、免疫賦活、ステロイド様作用、疏肝解鬱、和胃止嘔
黄芩	消熱、消炎、血管透過性低下、鎮静
半夏	制吐、鎮咳、祛痰
人参	消化吸收、全身機能の賦活
生姜	中枢性の制吐、半夏の毒性を中和、消化
甘草	抗炎症、抗アナフィラキシー
大棗	栄養、滋潤作用により柴胡、黄芩、半夏、生姜などの燥性をやわらげる

なることはしばしば経験するが、これは水分の偏在をなくす作用により、五苓散が胃腸に溜まった水分を体内に再吸収するためと考えられる。胃腸に水分が少なくなれば、下痢や嘔吐を改善することができ、同時に水が再吸収されれば脱水症状も改善する。

感染性胃腸炎に柴苓湯が有効な理由

感染性胃腸炎に柴苓湯を用いる理由は、柴胡と黄芩の抗炎症作用、抗ウイルス作用、抗菌作用に期待するからである。

生薬の面からみると、従来、上焦の熱すなわち肺や心の熱をさますためには黄芩、中焦の熱すなわち胃腸の熱をさますには黄連、下焦の熱すなわち腎や膀胱の熱をさますには黄柏が用いられてきた。つまり、胃腸炎に対しては、黄芩よりも黄連の方が適しているということである(表2)。一般的に、黄色を呈する薬物には消炎作用のある成分が含まれている可能性が高い。黄芩の主成分はバイカリン、黄連の主成分はベルベリンで、いずれも強い抗炎症作用を有する。黄芩と黄連をともに配合する処方の一つに半夏瀉心湯がある。半夏瀉心湯は半夏の作用により嘔気の改善が期待できるが、柴胡は含まれていないので疏肝作用による止嘔作用は期待できない。

表2 黄芩、黄連、黄柏の清熱作用

	薬 能	成 分	作 用
黄 芩 (根 茎)	上焦の熱をさます (消炎、解熱、止痢)	バイカリン	抗炎症作用、解毒作用、 抗アナフィラキシー作用、 毛細血管透過性抑制作用、 抗動脈硬化作用、利胆作用
黄 連 (根 茎)	中焦の熱をさます (消炎、鎮痛、健胃)	ベルベリン	抗炎症作用、抗ヘルペリン作用、 小腸の鎮痙作用、抗菌作用、降圧作用
黄 柏 (樹 皮)	下焦の熱をさます (消炎、健胃、止痢)	ベルベリン	抗炎症作用、抗ヘルペリン作用、 小腸の鎮痙作用、抗菌作用、降圧作用

柴苓湯は、五苓散による強い制吐作用が期待できることに加え、小柴胡湯の黄芩による抗炎症作用が期待できる。しかし、胃腸炎により有効と思われる黄連は含まれていないため、筆者は強力な抗炎症作用を期待して、柴苓湯に黄連の主成分ベルベリンを含有するフェロベリン錠®を併用している。代表的な症例を次に示す。

症 例

1歳6カ月、男児

白い下痢便が1回起こり、食欲がなくなったのでぐに来院した。体温は37.2℃で元気はある。嘔吐はしない。ロタウイルスによる急性胃腸炎と考え、柴苓湯1.5gとフェロベリン錠®1錠をつぶして粉にしたものを1日分として3日間処方した。6時間は絶食とし、その後、粉ミルク80mLを1日6回与えるように指導した。

本症例は、発症後すぐに治療できたので、その日のうちに2回程度軟便があったが、次第に改善し、2日目には通常便となり完治した。

まとめ

近年、抗生物質の乱用によって耐性菌の増加が問題になっているが、消化管の感染症でも同様の問題がある。また、抗生物質の使用により細菌叢が変化し、ノロウイルスやロタウイルスなどが繁殖しやすくなったことも考えられる。抗生物質は高熱を伴い諸症状が重篤な場合にのみ用いるべきであると考えられる。

これに対して、漢方薬には体内水分の調節作用、消炎作用、抗菌・抗ウイルス作用、免疫賦活作用などがあり、対症療法しかない感染性胃腸炎にはきわめて有効である。特に感染性胃腸炎は、下痢、嘔吐、嘔気といった五苓散が適応となる症状があり、また一方で発熱、腹痛、嘔気といった小柴胡湯証も呈するので、小柴胡湯と五苓散の合方である柴苓湯は効果があると考えられる。

【参考文献】

- 1) Braunwald E: ハリソン内科学(原著第15版), メディカル・サイエンス・インターナショナル: 244, 2003
- 2) 小林宣道 ほか: 注目される感染症:診断と治療の進歩 V.病院内感染症 3. ウイルス性感染性腸炎, 日本内科学会雑誌, 96 (11): 2476, 2007
- 3) 橋本 浩 ほか: 臨床データ 小児のウイルス性胃腸炎に伴う嘔吐に対する五苓散および柴苓湯注腸投与の比較検討, 漢方医学, 25 (2): 73-75, 2001
- 4) 吉矢邦彦 ほか: 消化器疾患 ロタウイルス感染症に対する柴苓湯のコントロールスタディ, 小児科臨床, 45 (9): 1889-1891, 1992
- 5) 森本昌宏: 柴苓湯, Pain Clinic, 25 (6): 812-814, 2004
- 6) 伊藤 良 ほか: 中医処方解説五苓散, 医歯薬出版: 164, 1983